

1 学校教育目標
21世紀をたくましく生き抜くために「生きる力」を身につけた児童の育成を図る。

2 学校経営ビジョン
1 地域の中の学校づくりを具現化する。 2 校長としての組織マネジメントを明示する。 ○目指す学校像 【 地域とともに伸びる学校 】 ○目指す職員像 【 足もとからの地道な実践 】教育愛に燃える職員・実践できる職員・明るい職員 ○目指す子供像 【 ああ、今日も学校に来てよかった 】実践できる子・豊かな心で接する子・健康でたくましい子

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
一、学力の向上 ・授業力のレベルアップ ・学びのルールづくり 一、特別支援教育の推進 ・個を見抜く力の研修 一、人権・同和教育の推進 ・ぬくもりある学級集団づくり 一、危機管理の徹底 ・安全、安心の学校づくり	保護者から寄せられた114項目の意見や要望に対する学校の考えを別途、保護者に配布した。回収率は91.1%(昨年度90.3%)と高く、保護者の学校への関心の高さを伺うことができた。 9項目のうち、Aが3項目、Bが5項目、Cが1項目であり、学校運営に係わる目標は達成できた。しかし、学びのルールづくりが完全でない。今後は、学力保証、学力向上を核とした学校運営の見直しを図りながら、基礎となる学びのルールづくりの徹底を図る。 具体的には、研究授業のあり方、日々の教育実践のあり方、国語科と算数科を両輪とした授業の質のレベルアップ、個への具体的支援のあり方等々、学力向上、人権・同和教育、特別支援教育をリンクした教育実践の創造である。

5 総括表

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校運営	●学校経営方針	重点目標の周知	○教育方針や「学校の様子が分かる」と言える保護者が97%以上になるよう目指す。 (昨年度実績は96%)	○学校日より、HP、携帯電話サイトを充実し、定期的な情報の送受信を行う。 ○学級日より、生徒指導日より、保健日より、TT日より、給食日より、教育相談日より、図書室日より等を各担当者が発信する。 ○職員が学校づくりに参画する場を充実する。 (部会、職員会議、各種校内小委員会)	A	○今年も配慮したのは、重点目標をどのように具現化しているのか、その過程を各種便り、ホームページ、機関連絡等で情報を発信してきた。さらに、情報発信するだけでなく、総会、授業参観日、各行事、学校評議員会、PTA会議等において学校への意見を真摯に受け止めていった。その結果、保護者アンケートによると、97%が「学校の様子が分かる」と回答。昨年度より1%アップした。
	●危機管理	安全対策	○事故者ゼロを目指す。 (昨年度交通事故実績はゼロ)	○毎月の定期的な安全点検だけでなく、各担当が危険箇所をできるだけ日々点検を行う。 ○保護者携帯電話によるメール発信システムを定期的に更新する。 ○朝の交通指導を強化し、下校時における地域への協力や要請等を通して安全指導の徹底を図る。 ○毎月の全校朝会で、生徒指導主任による指導を行う。 ○生徒指導年間スローガン「あ・り・た」を各学級で具体的に指導する。	A	○交通事故が皆無であったことは、日頃の生徒指導、学級指導、それに地域安全ボランティア隊員による指導が功を奏したと思われる。生活自己も極めて少なく、児童は比較的落ち着いた生活が過ごせたようである。 ○携帯電話による保護者へのメール発信システムも稼働により、保護者の95%が加入しており、緊急を要する時や学校行事等の案内ができ、保護者は安心して子どもを学校に預けられていると思われる。一方、学級により取り組みの温度差がある。特に年間スローガン「あ・り・た」の指導が必要である。

教育活動	●学力向上	指導法改善	○「学習がわかる」児童を各学級90%以上つくる。 (昨年度実績は87%)	○2年を除く全学級に算数科の少人数・TTIによる指導体制を敷く。 ○研究主題に基づく研究授業を全担任が行う。 ○講師を少なくとも3回は招聘し、授業の質を向上する。 ○県学習状況調査やCRTを分析し、児童個々の学力向上に努める。 ○朝のドリルタイム・放課後の個別指導の時間を充実させ、個の学力向上を図る。	B	○校内研修を学力向上の基幹と捉え、全体研究授業、講師招聘による研究会を実施していった。職員の研修意欲が高まり、質の高い授業を目指すようになった。また朝の国語、算数のドリルタイムでは、級外職員も積極的に各学級で個別指導や学習評価を行った。しかし、県学習状況調査やCRTでは全学級で県平均を上回らなかった。次年度の大きな課題である。また、「有田っ子スタイル」(基本的な学習習慣)の定着が急務である。研究推進委員会で本校独自のスタイルを検討する必要がある。
	●心の教育	道徳教育、人権・同和教育	○90%の児童が「ああ、今日も学校に来てよかった」と思えるようにする。 (昨年度実績は87%)	○道徳授業、人権週間、平和集会、中部小集会ふれあい道徳週間、全校集会等を実施したり、各種アンケートを通したりして児童の実態把握に努め、児童の心の居場所を作る。 ○会議の効率化や行事の統廃合を図り、担任と児童ができるだけ多くの時間を共にできるようにする。 ○道徳「心のノート」の活用を図る。	B	○児童の88%が「学校は楽しい」と回答している。年間を通して道徳授業の充実、各種集会、個別指導、特別支援教育の充実等の取り組みの成果だと思われる。また、他校と異なり比較的職員一人あたりの校務分掌が少ないため、児童と接する機会が多くとれ、児童と会話の時間がとれやすいためだと想定できる。一方、6年女子の保健室登校が多く、今後、小中連携のもとで、追跡調査、中学校との共通理解を図る場が必要である。
	●健康、体づくり	健康教育、体力向上	○朝食を摂る子が100%になるようにする。 (昨年度実績は、98%)	○歯磨き、健康観察、フッ素洗口の恒常化を図る。 ○スポーツテストの実施、給食指導の充実を図る。 ○個人チェック表を作成し、習慣化を図る。 ○朝食抜きゼロを目指すため、保護者の協力を得るような働きかけを行う。 ○素足による学校生活を励行する。 ○食育の年間計画をたてて実践する。	B	○95%の児童が早寝・早起き・朝ご飯の習慣がついている。家庭教育への啓発の成果である。またフッ素洗口、裸足での学校生活、スポーツテストも効率的に実施でき、児童が健康について意識できるようになってきた。交通事故もなく安心・安全な学校生活が過ごせるようになってきた。一方、体の柔軟性に欠ける児童や、少しいことで骨折する児童も少なくはない。学習指導要領の改訂に伴い、体育学習のなかで、これらの克服ができる学習指導の工夫が求められる。
	●特別支援教育	個に応じた教育の推進	○特別支援教育についての保護者の認知度を80%にする。	○機会あるごとに保護者への啓発を積極的に行う。(2学期に教育講演会の実施・PTA総会や学校だよりによる紹介) ○1学期中に気になる児童の実態把握を行ったり、教育相談部会を定期的に開催したりして、児童の共通理解を図る。 ○SAの活用や毎週木曜日の職員朝会等を通して児童の実態を把握し、改善を図る。 ○保護者との連絡を密にする。	A	○年間を通し、定期的、不定期的に拘わらず特別支援教育の職員の研修会を実施した。さらに保護者参加のもと特別支援会議も開催した。また、SAの活用、職員朝会での共通理解にも努めてきた結果、保護者の84%が個別の支援・指導体制ができていたとの評価を受けた。次年度も、特別支援教育と人権同和教育を根幹とした学校経営、学級経営が益々必要である。保護者に細やかな情報を発信することも忘れてはならない。
	●小学校低学年の学習環境改善充実	生活習慣・学習習慣の定着	○100%の児童が「有田っ子スタイル」を守るようにする。	○基本的学習習慣「有田っ子スタイル」を各教室に掲示し完全定着を図る。 ○朝の時間、帰りの会等において意識化を図る。 ○保護者用「ありたっ子スタイル」を配布し、協力を願う。	C	○2年連続のCである。原因は、校内研修との連携不足、学級の温度差である。次年度は、研究推進委員会で本校独自のスタイル(生活習慣・学習習慣)を作成する。また、検証する機会も必要である。早急な具体策を4月・5月に提案する必要がある。
特定						

●地域連携	PTA、地域との協力・連携	○授業参観の保護者の出席率85%を目指す。 (昨年度実績は83.2%)	○保護者へ行事を早めに知らせる。 ○各部会へ職員が参画意識を持って交替で参加する。 ○学校だよりを2ヶ月に1回、地区回覧とする。	B	○「地域に学ぶ学校づくり」の理念のもと、PTAや地域の行事には職員が積極的に参加していった。特に夏季休業中前には、各地区の懇談会に地区担当職員が出席し、情報を交換した。また、学校だよりを定期的に地区へ回覧することにより、地区民の身近にある学校としての存在を示していった。授業参観率は若干下回ったが、経済景気も影響していると思われる。
-------	---------------	--	--	---	--

6 総合評価

自己目標の実現のために努力した職員は97%、保護者への情報発信に努力した職員89%、学力向上の方策に取り組んだ職員93%、校内研究主題に基づく授業を行った職員69%、人権同和教育の理念に基づく学級経営を行った職員100%、個別指導を積極的に行った職員96%、望ましい生活習慣の定着指導を行った職員82%、望ましい学習習慣の定着指導を行った職員81%、保護者やPTAと連携協力した職員79%である。(2月のアンケートより)必ずしも全項目で職員の共通理解が得られなかったが、職員が意欲をもって教育実践に取り組んだことは事実である。さらに、4項目の重点目標に残念ながらその達成が遠い項目もあったが、ある程度の成果は得られたと思われる。特に重点目標の周知、特別支援教育の推進、危機管理の徹底では、学校運営と学級経営の根幹をなすもので、その取り組みは組織的に実行できた。しかし、前述のように、学習習慣の徹底については今一度年度当初に徹底した論議を行い、その実行が必要である。次年度の大きな課題である。

7 次年度への課題・改善策

何よりも、職員の資質向上が最重要課題である。職員が組織として自らを鼓舞し、研修に励む体制作りを行う。そのために、先ず①学校重点目標、自己目標、学級目標、学校評価のリンク付けを行う。次に②校内研究、教科指導、学級経営のリンク付けを行う。これまでは、各人の主体性という名のもとに各自に任せていた部分が多かった。しかし、学校は組織体である。学年当初に徹底した共通理解を行い、全ての教育活動が、本校の重点目標追求の方向に向かうよう推進していく必要がある。③そのため、学校評価項目を各部門ごとに作成し、年度終わりに各部門で責任をもって評価する体制をつくる。また、学校重点目標もボトムアップを取り入れ、重点目標に基づいた自己目標の作成を職員に期待する。そうすることで組織としての学校運営の活性化が期待できる。